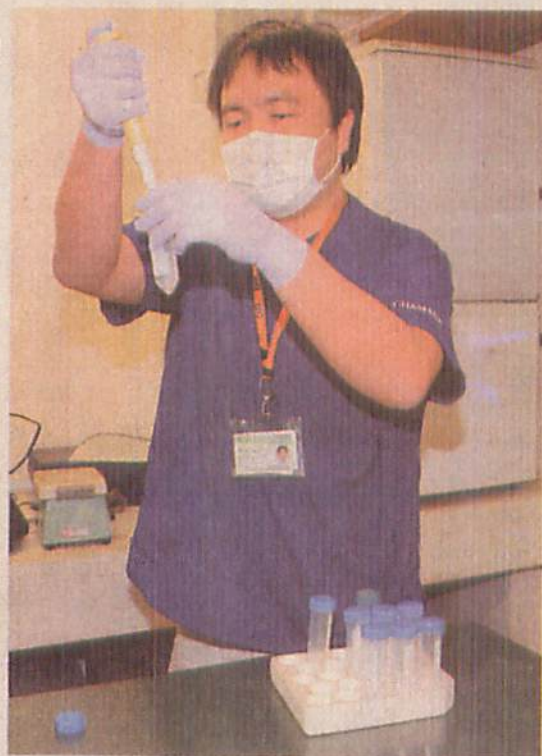


口腔がん 死亡率高く 発見時は進行

口腔がん患者が増えている。初期はほとんど無症状なため、気付いたときは進行し、手遅れになることも多い。専門家は歯科医での定期的なケアを習慣づけ、早期発見につなげるよう呼び掛ける。

口腔がんは舌がん、歯肉がんなど口の中のできるがんの総称。2014年のがん統計予測によると、咽頭がんと合わせた新たな罹患者は約2万人、死者約1万人だった。日本では、中高年男性の割合が高い。

県内の11年度の人口動態調査では、口腔咽頭がんの死者は1



回収したうがい液からDNAを抽出する濱田倫史助教

鹿児島市の鹿児島大学歯学研究棟

鹿大病院 うがい液検査法に期待

31人で、増加傾向という。11年の成人男性の年齢調整死亡率は全国で2番目に高く、10年は一番高かった。

県歯科医師会は「歯科医院を定期的に受診していない人が多く、早期発見できないのではなか」と分析。近年、検診や啓発など、口腔がん対策に力を入れている。

早期発見に期待されるのが、鹿児島大学病院口腔顎顔面センター口腔外科(杉浦剛教授)が確立した、うがい液による検査法。体に負担をかけず簡単にがんを見つけられる。

昨年9月には、がんの元になる「前がん病変」を高精度で検

出できる方法の特許出願した。現在、商品化、実用化を目指し、数社の企業と検討を進めている。

検査法は生理食塩水20ミリリットルで30秒間うがいした液の中にある口腔粘膜から剥がれた細胞を採取。DNAを取り出し、がんを抑える遺伝子を変異した「異常メチル化」の有無を調べる。肉眼で見えない、がん抑制遺伝子の異常の蓄積度合いも分かる。

がん研究グループチーフの濱田倫史助教(右)は大学や歯科医院での検査も視野に入れ「鹿児島で口腔がんの死者をゼロにするのが究極の目標。県歯科医師会と連携して、県民に身近なサービスとして確立したい」と意気込む。

県歯科医師会の森原久樹会長(73)も「うがい液の検査は死亡率を減らすために有効で、歯科医はみんな期待していると思う。県歯科医師会としても協力したい」と話している。

(清水裕貴)

